

寄生虫



寄生虫

つまらない話をしよう。

何をするのにも並大抵だった俺の人生に起きた、最初で最後の不可思議な出来事の話だ。

俺の耳は昔から少しだけおかしかった。

聞こえが悪かった訳ではなく、常人と比べ少し異常だったのだ。

普段の生活をするには大して困ることはなかったが、それが異常だと理解をするまでは支障があったのだといえるだろう。

俺には「声」が聞こえていた。ただ声が聞こえるのなら至って普通だが、その声には形がなかったのだ。それは時々、一言二言聞こえてくるが、スピーカーの役目をする人間の体はなく声だけが聞こえてくるのだ。

自分に見えているものから聞こえる訳ではないことは分かっていたが、寧ろそれ以外のことは分からなかった。

幼い頃はその「声」の異常さに気づくことができなかった。俺にはそれが当たり前で聞こえていたし、それは周りの人間もそうなのだと思うていた。

物心ついた頃には「幻聴」という言葉を覚え、自分に聞こえている「声」が周りに聞こえていないことを知った。

それと同時に「声」についての興味と探究心が当時の自分を支配した。

大袈裟にいつてみたものの、わかったことといえば幻聴という二文字だけで、主観的に「声」に関わったこと以外は簡単に二文字で表されてしまうのだ。

若かった自分にそれ以上の探求心など続くはずもなく、わかったことといえば経験したことでの事実でしかなかった。

「声」の聞こえる条件のようなものがあるというのなら、沈黙に支配されている時や、逆に音に支配されている時に聞こえるようだ。そして雨が降っている時は聞こえることがないということだけだった。

これに気づいたあとは「声」に対する興味も意識も薄れ、ありふれた日常へと戻り面白みのない毎日を繰り返しただけだった。

そんな毎日の延長線上にあるはずだったあの日を除いて。

「あなたもきせいちゅうですか？」

いつもどおり会社へ向かう人ごみの中、唐突に声をかけてきたのは幼くもなく、さりとて大人びているわけでもないと表現するのがしっくりくるような少女だった。

見ず知らずの相手からの「寄生虫ですか？」という訳のわからない質問だったが、その少女が一点の曇りもない目で聞いてくるものだから、新手の宗教かなにかかと思った。

「申し訳ないが、俺は宗教に興味なんてないんだ。勧誘なら他をあたってくれないか」

普通に考えれば宗教の勧誘というものを除いても失礼極まりない返答だったのだが、少女は気にした素振りを見せることなく更に質問を投げかける。

「きせいちゅうってしていますか？」

馬鹿にされているのでは、そんなことが頭をよぎったが、少女からはからかいの色は見えなかったので質問に質問で返すことにした。

「君はどうして初対面の相手にそんなことを聞くんだ？」

こんなシチュエーションがあつたら誰でもまずは聞くであろう疑問を投げかけると返ってきたのは普通の返答ではなく、普通の人が聞いたら頭がおかしいのではないかと首を傾げていただろう。それでも少女の一言を聞いたとき、確かに俺の心は動いたのだ。長年の間睡っていた探究心という名の好奇心が、一瞬で少女へと向けられていた。

「あなたにも声がきこえていますか？」

それは単純で完結な言葉だった。

「わたしにも聞こえていたからわかるんです。なんとなくですけど、聞こえてる人って似たような雰囲気だったりするんです。だから意識すると、鼓膜がふるえるんです。もしかしたら共鳴してるのかな。」

そう言った少女はふわりと笑った。

意味がわからない。

少女の言っていることは理解し難くて普段なら鼻で笑って無駄な時間を過ごしたと歩き始めていただろう。それでも「声」を知っているからか、俺は理解しようとしているようだ。そんなことを冷静に考えていた。

「俺は、君の言っていることがいまいち理解できてない。だから単純に質問したい。君は共鳴だとか言っていたが、この声は幻聴ではないということなのか？」

本当は聞きたいことなんて山程あって、それでも完結に聞くことができたはずだ。

「その声は、幻聴ではありませんよ。あなたがまだ聞こえているのなら、今はまだ教えることはできないけれど。」

そんな微笑みで意味深なことを言われてしまうと、気になってしまいうだろう。どうでもいいところにまで文句をいたくなってしまうがそれどころではなかった。

「まだ聞こえてるならって、今は教えられないってどういう・・・」

言いたいことを全て捲したてあげようとした俺に少女は指を口にあてて静止した。自分でも気づかなかったが暑くなっていたのだろう、柄にもなく大声を張り上げそうになっっていたようだ。

「あなたにもきつとわかるはずです。わたしも詳しいわけじゃないけれど、自分の経験と都市伝説をてらしあわせたら、わかったような気がするだけなので。ただ、あなたにまだ声が聞こえているのなら、その声を愛してあげてほしいんです。わたしみたいに聞こえなくなってから後悔しないように。」

次の瞬間、俺の頭の中に音が流れ出し少女は人ごみの中へ消えた。聞きなれた音だ、人の音。街の音。

音が聞こえなくなるくらい集中していたのか、あの少女のせいで聞こえなかったのか俺にはわからなかった。

それでも俺は悲しくなるくらい現代人で社会人間のように、会社に向かっていた途中だということに気づくと、俺の最優先リストが「声」から会社へと書き換えられた。

この日の仕事中は少女の言葉に気を取られすぎて、仕事に身が入らなかったことは言うまでもなかった。

灯りのついていない家に帰ると、すぐにパソコンの電源を入れた。

こういう時、独身だと夕飯の時間や相手の機嫌を気にすることもなく好きなことができるので楽だ。別に恋人がいらないからとかの強がりではない。強がりではない。

あの少女は都市伝説といていた。

若い女が似たような経験と都市伝説を重ね合せているという線もなくはないが、今はあの少女の言葉だけが頼りだった。

インターネットを立ち上げて、少し悩みつつ検索ボックスに「都市伝説 きせいちゅう」と打ち込んでみた。

パソコンは特に苦手な訳ではないが、読み込みしている間の待つている時間が凄く嫌いだ。なんともいえない時間が終わり、画面上には検索結果が並びでる。

一番上にでてきたサイトには「寄生虫にまつわる都市伝説」などと書いてあったが、やはり実際にいる寄生虫に対することなどがほとんどだった。やはり眉唾ものの話にあの少女が関連付けただけなのだろうか。

帰宅してすぐにパソコンをつけた自分に少し馬鹿馬鹿しくなり、小さく溜息をついて検索結果をあさりだす。流し観をしていたが、一番下にある文字をみた瞬間に背筋が凍った。

奇声虫

いつページを開いていたのか覚えていない。
咄嗟に開いたのか、放心しながら開いていたのかもよく覚えていなかった。
そこに書かれていたのは少量の文字の羅列。

【奇声虫とは：他人の声を借りて話しかけてくる人間の耳の中に寄生するという都市伝説。
話す言葉は少なく、周りが静かな時や賑やかな時に話しかける。雨が苦手らしく雨の日には隠れてしまうので話さない。寄生することと人間側からは声が聞こえるので寄生虫からもじって奇声虫と呼ばれているようで、奇っ怪な声を発する寄生虫ということらしい】

文字で見るとなんとも味気なく。それゆえにこの少ない文字の中に俺の知っている声の正体書かれていた。
これはあの少女の思い違いなどではなく、現実の「声」のことなのだろう。

あの時の自分が最初に思ったのはそんなことだった。

そして俺の昔話の本編はここから始まるのだ。

前置きが長すぎるとかそんなことは言わないで聞いて欲しい。ただ、少し長いプロローグに比べ、本編が短すぎただけのことなのだから。

パソコンを開いたあの日から数週間後の話だ。

俺はいつもどおり会社へ向かうために人ごみを歩いていた。だが、この日はいつもどおりではなく、新しいビルを建設する為に道が通行止めだったのだ。

まだ会社までの時間には余裕があったから焦る必要はなかったが、運動不足のサラリーマンにとって回り道というのは辛いものがあるのだ。

そんな風に皮肉ってはみたものの、今はまだ鉄の塊でしかないビルを睨んでいても仕方がないので、渋々回り道をする為にビルの敷地をぐるりとまわることにした。

この日がいつもと違うことなんてそれだけのことだった。

俺の耳は、今でもはっきりとあの日の音を鮮明に記憶しているのだ。薄ぼんやりとしている俺の記憶の変わりだともいうかのように。

人ごみのざわめきの中に僅かに違うノイズが混じる。

小さな悲鳴、誰かの洩らした吐息、誰かの走る音、誰かが倒れた音、そして誰かの叫び声。

「きゃあっ」「あ、「逃げろ!」「タタタッ」「鉄柱がッ」「イヤアア」「おいっ」「うわあ」「助けっ:」「落ちてくるぞ!」「きゃあああ」「:ッ」「痛っ」「おい、早くッッ」「ドスン」「う、あ」「上だ!」「逃げてッ:」「ちよ、「うわああ」「逃げ:」「危ない!」

そこで強制的に俺の意識は途切れた。

さつき見たビルになるはずだった鉄柱が俺の歩いてた所へ落ちてきたらしい。そんなことすらこの時の俺は知らなかった。

目が覚めると病院のベッドの上で、痛みすら感じない体に夢かと疑ったが、涙目になり心配しているのが可愛い恋人などではなく同僚の男だということに現実だと確信する。体が動かないことに一抹の不安を覚えたが、どうやら麻酔だったようなので安心した。

同僚によれば落ちてきた鉄柱は俺の腹部を貫いていたらしく、死んでいてもおかしくはなかったそう。

幸いなのか、俺以外には怪我人もなかったらしい。

ふと視線を同僚の横へ逸らすと、そこには紫陽花の飾られた花瓶があった。綺麗な色をしているが、紫陽花をお見舞いへ持ってくるのはタブーではなかっただろうか。

「なあ、その紫陽花ってどうしたんだ?」

「これか?」

そういうと同僚はにやりと笑いながら花についていたらしいカードを見せてきた。

「お前どこであんな子と知り合ったんだよ。なんつーか、制服着た紫陽花って感じの雰囲気した女の子が持ってきたんだよ。あの場にいたらしくってな、お前が無事だってわかるまでずっとそわそわしてたんだ。紫陽花が病院にはタブーってことも知らなかったんだろうな。」

さりげなく少女にフォローを入れ、同僚は動けない俺にも見えるようにカードを近づけた。

そこには「あじさいのはなことばって知ってますか?」とだけ書かれていた。

「花言葉:??」

生憎だが、花を贈る相手のいない俺には花言葉なんてものには縁がない。花の名前だってろくに知らないというのに。

「やっぱりな、お前そういうの疎いだろ。」

「ほっとけ。」

「紫陽花の花言葉は、なんと、愛してくださいなんだよ!」

「ほんとお前そういうこと詳しいよな。」

まるで少女からの告白なんだ。とても言いたげにテンションを上げていう同僚に軽く生暖かい視線を送ると、あの日少女のいつていた言葉を思い出す。

「愛してあげてほしいんです」

つまりは、この紫陽花もそういうことなんだろう。

そこで俺の中にあつた違和感が確信に変わった。目が覚めてから、まだ「声」を聞いていないのだ。

それから俺はまだ「声」を聞いていない。

今なら少女がいつていたことの意味がわかる気がするのだ。

聞こえなくなったという意味、後悔する前に愛してあげてといった意味、生きている意味。

「奇声虫」は、あの日俺の変わりに死んだのだと思っている。

だからあの傷でも俺が生きていて、声が聞こえることがなくなったのだと。

少々ファンタジーすぎる考え方だとも思うかな。いや、俺自身もそう思っているさ。

ただ、そうであればいいのだと俺がそれを事実だと思ったなら、それが事実でいいだろう。

あの「声」について事実を知っているのは「声」だけだ。それならば、それを唯一聞いていた俺だけが追求できるのだろう。

奇声虫という存在は確かに俺の中にいて、あの怪我をした日を境になくなった。

そして死んでもおかしくないほどの大怪我を負った俺には不思議なくらい痛みは少なく、回復速度も医者が目を見張るものがあつたのだ。

俺は超人なんかではないし、至って平凡な人生をおくってきた。

後にも先にもあの時だけが俺の人生で浮いているが、あれが奇声虫に助けられたからなのだというなら自力だったというよりも現実的に思えた。

だから、もし誰かにこの時のことを聞かれたのなら俺はこう答えよう。

「きせいちゅうという都市伝説を知っているか。それは生まれた時から自分の中にいる。寄生することと、奇っ怪な声を発するから奇声虫とも呼ぶんだそうだが、これには続きがある。

奇声虫は人間に命の危険が及ぶと身代わりになって死んでしまうんだ。

だから俺は奇声虫ではなく、「貴生虫」と呼んでいる。貴殿の為に生きる虫ってわけだ。少しキザだったかな。歳をとるとこういう言葉がでてきてしまうものなんだ。

貴殿が嫌なら貴方でもいいだろう。読み方は同じだからな、好きにしたらいいだろう。

あの声は俺の為に生きて死んでいった。それは事実なのだから。」

つまらないと感じたならそれでもいい、つまらない話をする最初にいつておいたはずだ。ただ、俺を救ったあれを俺は愛していた。それだけをわかってくれたのならそれでいい。

あの日、俺は鉄柱にぶつかる前に意識が飛んだ。

普通なら一番記憶に残ってしまうであろう衝撃や痛み、恐怖などは一切ない。その時の記憶は朧げでほとんど覚えていないのだ。

その記憶の変わりだともいいたいのか、あの時間聞いた音が耳から離れない。

あれから俺はまだ「声」を聞いていない。

あの日、聞こえた「危ない」という「声」を最後にして